

慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resources

Title	三田の独文：黎明期の星
Sub Title	Spuren der Keio-Germanisten
Author	小名木, 榮三郎(Onagi, Eizaburo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.44 (2008.),p.107(10)- 116 (1)
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20080930-0107

三田の独文——黎明期の星——

小名木榮三郎

かつて明治四〇年代半ばの三田山上には、軍医総監・森鷗外が文学科に出講し、従卒をしたがえて、馬上悠然たる勇姿を見せていた。またフランス帰りのダンディーな青年作家・永井荷風が「三田文学」を主宰し、気鋭の文学科教授として、颯爽たる風貌を見せて登場したのは、明治も終りの一九一〇年のことであった。このように、その時代の頂点を映す貴重な画像を思い浮かべるだけでも、黎明期の輝きに包まれた三田の文学の歴史は奥が深いことが知れよう。

しかし慶應義塾が社会的な盛名を得るようになり、大司令による教育・研究機関として本格的に組織を充実させるのは、大正も中頃のことであった。文学部、経済学部（もと理財科）、法学部、医学部の四学部体制で、社会的評価をさらに高めてゆく時期を迎えた。

文学部にも史学、哲学のほかに文学科が設置され、専攻の領域もその時代の西洋文化への強い関心に応じて、英文学、独文学、仏文学、さらにまた一方で伝統ある中国文学の専攻課程も設けられて、青雲の志を抱く学生の志望に応えるようになった。文学科に入学する学生の多くは作家を目指し、詩人への夢に心を躍らせていたので、主専攻に一人深く沈潜するよりも、文学活動への情熱を発散する機会と場を求めて、愛好者同士の交流に身を投ずることが多かつたようである。

三田の独文が学界に名を高めるようになるのは、主任に茅野蕭々（ちの・しょうしょう）教授を迎えた時期に始まる。昭和初期の我が国の大学で独文コースを持つのは本郷（上田整次）と京都（藤代禎輔）、それに三田と早稲田（山岸光宣）に限られていた。歌人として知られた茅野さんは本郷の大学で独文学研究を重ね、ゲート研究の成果を三田で展開した。その浩瀚な大著『ゲョエテ研究』（第一書房・昭和七年初版、昭和八年学生版刊）にまとめて世に問うた内容の骨子は、昭和初期の五年から八年頃に、三田の学生を前に数年にわたって続けられた講義であった。それは大詩人の膨大な作品内容を生涯

の歩みと共に解説し、ドイツにおける諸家の研究を取り上げ、論評した画期的研究であった。その名講義を聴く機会を得た学生の中にいたのが一ノ瀬恒夫さんであった。戦後に自らもこの詩人像を語る立場になると、「茅野先生の講義ではこの点を力説されていた……」と、常に先生への尊敬の念を込めて私たちに語っていたのが忘れられない。一ノ瀬恒夫さんは茅野先生の影響のもと、その後もゲーテ、ロマン派詩人の研究を続け、特にブレンターノの小説を翻訳し、『愛の泉』の題名で戦後に上梓した。(『勇敢なるカスパールと美しいアンナール』、『旅書生の記録より』 思索社一九四八年) 一ノ瀬さんは後に日吉の新制高校設立に尽力し、初代小池隆一校長を補佐する副校長として、塾高の基礎を固めた。その後は法学部教授に就任と共に、ドイツ語・ドイツ文学の指導の傍ら、一貫してゲーテおよび抒情詩の研究に取り組み、『ドイツ詩学入門』(大学書林一九六五年)を残している。例証に富むこの書には、青年期から白秋ばりの詩作を楽しんだ成果の投影を見ることが出来る。

明治・大正期における慶應義塾・独逸語主任の向軍治(むこう・ぐんじ)の去った後、開設早々の独文から菓

立ったのは加藤元彦さんである。戦前は予科でドイツ語を担当し、戦後は義塾復興期に独文の再建に努めた。京都大学の成瀬無極教授を塾に招聘し、それと同時に三田に本拠を移した成瀬会長の「日本ゲーテ協会」の理事となり、慶應からのさまざまな援助の窓口の役割を果たされた。また創設期の「日本独文学会」にも理事として参画された。また塾に新たに創設された「大学通信教育部」の事務長として、部内および対外関係を調整し、大学における「通信教育課程」の基礎となる体制を固めた。教材の作成と配本、面接授業および出張試験の運営など、すべて一からの手探りの仕事であり、しかも他大学との協調と慶應の独自性の維持に努めた功績は逸することはできないであろう。

このほか戦前の昭和の時期に独文を専攻した学生の中からは、淵田一雄さん、村田碩男さん、高橋文雄さんの名も挙げられる。いずれも黎明期の独文コースで研究を深め、三田のドイツ文学研究誌「ブルンネン」に成果を残されている。これは当時としては「エルンテ」(本郷)、「カスターニエン」(京都)と並ぶ高級文学研究誌であった。(日吉の旧ドイツ語合同研究室で焼失を免れた同志

を私も見かけた。同学社『ラテルネ記年号1』(昭和五九年) S202参照) これらの方々は塾を卒業されてからは、戦時色を強めていったこの時代に、ドイツ語を生かした仕事に携わり、外務省の嘱託を務めるとか、翻訳もなさったようだが、パウル・ハイゼ・淵田一雄訳『忘れられぬ言葉』(岩波文庫：昭和一一年刊) もその成果の一つであった。このほか戦後のヘッセ研究で国際的に知られる井手貢夫さんも、戦前の三田で茅野先生の指導を受け(昭和一〇年卒)、戦後は東海大学教授を経て、北の大地に根を下し、昭和五年から北海道大学の教官としてドイツ語・ドイツ文学の指導と普及に当たられた。

軍国主義の深まりと共に、塾の教師陣にも次々と赤紙(召集令状) が届く中で、昭和一七年(一九四二年)尾崎盛景さんが独文専攻学生に加わった。尾崎さんも他の青年と同じく、応召により学業を中断せざるを得なかったが、戦地より無事帰国して卒業を迎えたのは昭和二二年(一九四七年)一〇月のことであった。

こうして翌年の昭和二三年(一九四八年)春に、小名木も独文の学生に加えていただいた。当時の独文教授陣の体制もよく知らぬま、入学したが、三田山上の塾監局

三階の小教室に出席し、小人数のゼミ形式による講義・演習に参加して、「独文専攻」の実情が解り始めた。この時期の学園の状況は、終戦直後のため軍隊靴姿の若者も少なくないし、持参の弁当も揃って食べるわけにいかない苦しい事情の者も見かけた。このように時代の混乱の収まりきれない事情があるとはいえ、当時の独文は文学科の中でも淋しい小所帯といわざるを得なかった。西脇順三郎(文学)、井筒俊彦(言語学)、折口信夫(国文学・芸能史)の諸先生の大教室は溢れんばかりの出席者でにぎわっていたが、独文の小教室では小人数の学生がからうじて教室を維持していた。美学科の金田廉教授の「ドイツ語学特殊」、守屋謙二教授の「独文学演習」のほかに、京大を定年退官された成瀬無極教授が「独文学特殊」、「近代独文学史」の講義を担当されるようになり、何とか屋台骨を支えてくれる状況であった。「戦後の復興もなお始まらないこの時期の独文を、一人支えて下さった茅野先生が、終戦直後の昭和二一年に亡くなられ、奥様の歌人雅子さんも時を置くことなく後を追はれた。その空いたポストを埋められるはずの東大教授・木村謹治博士も着任後間もなく病を得てお亡くなりになっ

た後に、ようやく成瀬先生をお迎えすることができた」と、尾崎さんから独文の現状を聞いたのは、学園生活に慣れ始めた後のことであった。このような事情を知って、改めて数少ない独文の学生として勉学に努める決心を固めた。

この少人数の独文専攻学生の中心となつて、とかくバラバラに散つて、夢を失いやすい状況の学生を取りまとめてくれたのは、尾崎盛景さんであった。昭和二〇年代の淋しい独文勢を維持しようとする尾崎さんの努力は、二〇年代の塾の復興期を通して続けられた。履修への助言、何ごとも乏しい時代における困難な文献調査、日本独文学会、日本ゲートル協会の企画する行事への献身的協力などは、どれもまさに「独文の助手」の仕事そのものであった。しかもご本人の生活も身分もなかなか安定しない中で、通信教育学生のレポートに対する入念な添削、稿料の少ない原稿執筆など、苦勞の多いことは明白であったが、いつも尾崎さんは三田山上のどこかで見かけることができた。授業に出席して顔を合わすときには、同僚、後輩への配慮を絶えず口にし、積極的な「文学・語学の研究」を説き勧め、独文学生の活性化に努めていた

のが忘れられない。

かような苦しい局面を克服しなければならぬ塾の独文にとつて、成瀬無極教授が昭和二〇年代に果たした影響力は決して少なくなかった。京大時代から盛名を馳せた教授の業績を必ずしもよく解し得ない若い学生たちに、「独文学特殊」の演習では、剣の道に秀でた瘦身の無極先生の鋭い声の一閃が、教室の空気を一変させた。その声で出席者は眼を覚まし、緊張が一段と高まり、教授の豊富な文学研究の成果を聴き知ることができた。今でも忘れ難い光景である。東京・根岸に生れ育った成瀬清さんが生来の蒲柳の質により、十歳から剣道に励んだこと、さらに東京帝大独逸文学科卒業直後の明治四〇年七月から一年ほど慶應義塾予科教授を務めたという、塾との古い縁に結ばれていたことなどを知るとき、三田における成瀬さんの存在が改めて輝きを加えるのを実感する。〔無極集〕一九五九年 S425, 499) その頃に使われたテキストの一例を挙げてみよう。伝統的な十九世紀文学の粹を味読する時代であったのが解る。(教科書版で入手可能な作品に限られていたのが条件であった。)

Adalbert Stifter: Der Waldsteig, Friedrich Hebbel:

Barbier Zitterlein, Gerhart Hauptmann: Hannelles
Himmelfahrt, Thomas Mann: Unordnung und frühes
Leid.

特に記すべき成瀬さんらしい印象に残る講義は、ハウ
プトマンの作品を取り上げた時で、名訳と年来の研究を
傾けた内容は往時の舞台を偲ばせた。芝居の世界に通じ
た無極先生ならではの名演、名訳に酔ったひと時であっ
たといえる。

このほかに忘れてならないのは、外人講師として戦前
から長く、日本でドイツ文化、ドイツ文学・語学を指導
された Leopold Winkler さんの存在である。ウィーンに
生れ育った生粋のオーストリア人で、特色ある豊かな白
髪、鉤鼻の個性的な顔を大柄な長身で支えていた。ウィ
ンクラーさんは本質的に詩人であり、同時に舞台人であ
った。その青年時代の夢を言葉の端し端しににじませて、
舞台の上さながらに我々を指導してくれたのが Goethe:
Faust であり、また Arthur Schnitzler: Liebelein、および
Der grüne Kakadu であった。

Professor L. Winkler は一八八〇年十一月一日 Wien
に生れ、友人の招きに応じて一九二二年（明治四五年）

に日本の地を踏み、しばらくドイツの一流の会社に勤務
した後、第一次大戦中に文学と言語文化の研究を深めた。
以来我が国のドイツ語教育に携わり、旧制東京高校、慶
應義塾大学からは教え子が多く巣立った。北通文、富山
芳正、生野幸吉の諸氏もその一端であろう。先生は日本
における体験をもとにした抒情詩の作品集を残している。
Leopold Winkler: Gedichte "A?". Ein Erosglück in
Japan. 1957; Sicht und Schau in Japan. 1959; Fremde
und Heimat. 1968. Ikubundo Verlag Tokyo. (先生の没後
に恩師を偲んで刊行)

晩年は在日オーストリア人協会会長でもあったが、一
九六二年四月、先生は八二歳で逝去された。

私より以前に独文を選択した学生の中には、飯田國男
さん、菊池愼吾さんもいたが、病氣療養のため後年に出
席するようになった。お二人は後に塾の大学教授として
ドイツ語の指導に当たられた。また早川光雄さんは早
稲田の露文に方向転換した。このほかにも同窓の友人に
は山下高明（NHK記者、解説委員）、飯塚周一（伊豆
新島出身で帰島）、佐藤徹夫（旧制高校出身）、高橋令二
（法学部教授、名古屋明德短大学長）、板垣方夫、吉岡南



DER ALTE PFLAUMENBAUM

Stehen kann er länger nicht mehr,
liegt nur auf der Stütze schwer;
doch die Wurzel, noch voll Saft,
haucht nach oben Andachtskraft,
und so blüht er, schon im Neigen,
mit im Lenz an allen Zweigen.

詩集の巻頭を飾る一葉と先生晩年の詩

Leopold Winkler : *Fremde und Heimat* (Ikubundo Verlag, Tokyo 1968)

海江（聴講）、すこし遅れて上田富士子の諸君の名を挙げておきたいが、神出鬼没の人もいて、いずれも学内での交際に終わっている。また私とは独文ですれ違い（昭和二八―三二年）となったのは矢嶋英敏氏（島津製作所会長）で、二〇〇五年大学入学式に塾員代表として、新入生に温かい激励の言葉を贈り、成瀬無極先生の訶（けいがい）に接した折の深い感動を語っていた。懐の深い独文のコースの魅力を、この時にいたって改めて知ることができた。

塾の独文を終えてからドイツに渡り、言語学をドイツの大学で教える日本人教授 Ezawa —— ドイツでは「エツァワ」を知っているかとよく聞かれた——として活躍した江沢建之助さんも、ほぼ同じ時期の入学であった。私と同様に昭和四年生れの東京育ちで、戦前・戦中の昭和時代を経験していた。自由闊達な発想の持ち主で、あまり授業の教室では見かけなかった。しかるべき場所です十分な叡智を得ていたのである。塾工学部でドイツ語を教えた後に、ドイツ留学の際、貨客船にブロックハウス全巻を持ち込んで読破し、マルセイユに上陸後、陸路ドイツに入ったと聞く。明治・大正期の航路の再現であ

る。やはりその言動から、三田にも、日本にも収まりきれない豊かな才覚の持ち主らしいと、器の違いを成瀬さん、尾崎さんとも改めて認めたものである。それはドイツで開花した後の業績が示すとおりで、ユニークなドイツにおける彼の仕事と生活の裏表を語りつくし、自らの告白と日本の現状への厳しい批判をまとめた『ドイツ人の現実』（慶應義塾大学出版会二〇〇六年）を読めば、次元の違う視点に誰しも納得するであろう。

この江沢さんに強いインパクトをもって強烈な語学上の刺激を与えたのは関口存男先生であろう。通称ゾンダ（Sondern にも Sonderling に通じるからか）さんは日本の伝統的なドイツ流のドイツ語学研究に追随することなく、意味形態論を軸とした独自の関口言語理論で一家を成した天才であった。特に大学の講義一覧には載っていないかったが、慶應外国語学校で心ある関口ファンに独特な語り口で、ドイツ語の本質を日本人に解りやすく、切り口鮮やかに解説していた。私も昭和二〇年代の夜の講義に出席し、初級および中級の文法説明と作品講読を聴き、非凡な天才の鋭い弁舌に圧倒されたのが、つい昨日のことのように思われる。以来ほぼ全部の関口さ

んの著作を読み、ドイツ語教師に必要な語学知識を得ることができた。異端視されていたこの天才語学者の文法理論に心酔した淵田一雄さんは、その遺志を継ぐかのように、同僚の村田碩男さん、後輩の尾崎盛景さんと共に、慶應外語の授業で関口理論に基づいたドイツ語の普及に努めた。その成果ともいべき平易な解説を、さらに三修社のドイツ語雑誌『Mein Deutsch』に飽きず展開し、これに共鳴する三田およびその他の語学研究者との多年にわたるコラボレーションも、逸することのできない立派な流れとなつて、世に認められるようになった。ドイツ語の難問に対して、関口理論から明快な解釈を得ると、最後には必ず、「やっぱり関口さんという人は偉いですね」とまとめる口癖が私には忘れ難い。

松本正夫先生（スコラ哲学・後に常任理事）に深く傾倒していた江沢さんの提議もあつてだろうか、高齢な客員教授の成瀬さんのほかに有力教授を得て、慶應義塾の独文を再興させようと、塾当局も動き出したのは昭和二八年以降であつたようだ。これは大学も戦後アメリカ式の「新制大学」に脱皮し、大学院の充実を図るようになつてからであつた。「独文に大学院を」の意向か



後列左：飯塚周一、飯田國男、江沢建之助、高橋令二
前列左：淵田一雄教授、成瀬無極教授、金田廉教授、山下高明、小名木榮三郎
(昭和 25 年 7 月第一校舎)

ら大学の理事も腰を上げると、某大物教授の名が挙がり始めたが、「ほかの仕事に精出してしまおうと困る」などの意見もささやかれ、話は進まないようだった。しかし東大教授の定年も近い相良守峯博士をお迎えしてはどうかの話には反対者もなく、「ほんとうに三田に来てくれるだろうか」の心配が先行するほどであった。文学部の小村実教授の提案もあり、橋本孝・理事（哲学）が礼を尽してお願したところ、頼まれれば何事もいやと断りきれぬ相良先生のお許しをいただくことができた。昭和二九年から非常勤としてご出講いただき、三一年には正教授としてお迎えすることに決まった。これで三田の独文も新時代に合わせて再生の方向を固めることができた。このあたりの事情については相良先生の回想録『茫々わが歲月』（郁文堂一九七八年）に詳しく、(S151ff.)

こうして活気を取り戻し始めた昭和二〇年代後半には、会長の成瀬さんと共に、京都から本拠を東京に変えた「日本ゲートル協会」の年二回の行事も三田で行われるようになった。尾崎さんを中心に若手が集まり、独文学生と共に八月二八日の生誕記念、三月二二日の追悼記念ならびに協会の総会をささやかながらも行い、ドイツ大

使館関係者を迎えて、慶應ドイツ文学会も看板に名を連ねた。懇親会も三田山上の施設、第二研究室の「野口ルーム」や塾監局の「第三会議室」などでおこなわれることが多かった。

ようやく相良守峯教授を三田にお迎えはしたものの、戦災を受けて十分な研究室もなく、当初は稲荷山の演説館に隣接する第二研究室で、仏文学の後藤末雄教授と相部屋を願うことになった。文学部の先生方が集まるこの第二研究室・二階の成瀬さんの部屋、と同時にまた相良さんの研究室ともなったこの角部屋で、日本ゲートル協会の事務を尾崎さんや私も幹事として、会費納入事務やプログラムの印刷作成、郵便発送に打ち込んだものである。本来の研究とはあまり関係のない「雑用」により、私も日本独文学会の諸先生の活躍を知る貴重な機会を得た。私にはその上、三田と新宿で相良先生の薫陶を受ける幸運にも恵まれ、生涯の方向を決めることができた。

相良さんは三田に来ることになると、まず独文研究室の蔵書の充実に努め始めた。三田の図書館には、戦前の独逸書はかなり買ってあるけれども、戦後の本は皆無なので、まずこれを補充した、と回想録に記している。

(S.196) また書籍と共に有能な若手教員を迎えることなり、慶應のドイツ語スタッフの充実を図った。これはまた新制大学の学生数増加、新学部創設の需要に応えるためでもあった。

昭和三〇年代中頃の慶應ドイツ文学会の布陣は次のようなものであった。

文学部…相良守峯、大野俊一、塚越敏、宮下啓三…村

田碩男、尾崎盛景、のちに黒岩純一

経済学部…後藤純三、飯田國男、猿田恵、中田美喜、

大橋孚、のちに鈴木威

法学部…一ノ瀬恒夫、高橋文雄、小名木榮三郎、高橋

令二、深田甫、のちに鉄野善資

商学部…淵田一雄、前田和美、近藤逸子、荒井秀直、

稲田拓、森田茂

工学部…越塚信行、菊池愼吾、小林栄三郎、沼崎雅行、

村田牧人、のちに井沢睿子

医学部…栗林茂、後藤純三、高橋文雄

(順不同)

(このほかにも田中次郎(哲学)、相内武千雄(美学)、山崎照雄(倫理学)、田中吟龍(論理学)、金原三郎

(かねはら・さぶろう、『慶應新独逸語読本』I・II・

IIIを編集、慶應義塾監局刊一九二一〜三六年)の諸

先生も各学部の有力なドイツ語スタッフであった。]

こうして「慶應ドイツ文学会」もかなりの勢力となり、

昭和三一年秋に着手し、数年の歳月をかけて完成したヘルマン・フリートマン／オットー・マン共同編集の『二

十世紀のドイツ文学——相良守峯監修・慶應義塾ドイツ文学会訳——』(慶應通信昭和三七年)の翻訳には、慶

應関係者のほか新任の若手の学者も総動員して、その名

を大いに世に広めることができた。これを機に毎年暮れ

に熱海や湯河原でドイツ文学会の総会を開き、相互の研

究と協力の充実を図った。

このように独文に迎えた相良さんの指導を受け、大学院での研究を終えた若手教員が活躍を始めた頃から、三田の独文は新たな飛翔の時期へと大きく羽ばたくことになった。

(筆者・大学名誉教授)

(和風と洋風の年号表記が混在しているのは、その時期の筆者の時代感覚と書籍の表示に基づいている。敬称略)